

ユーティエス、燕の新工場本格稼働 複数拠点で加工多角化



医療機器分野 請け負い検討

【新潟】ユーティエス（新潟県燕市、白倉幹之社長）は、燕市内に設けた新工場を12月に本格稼働する。半導体製造装置向けに量産する部品の生産を移し、本社工場は量産品ではない特注品などの加工に集中する。事業多角化の一環で、空きスペースは商社事業拠点とし、先行きは医療機器分野への参入も検討する。総投資額は約5億円。

ユーティエスはマシンングセンター（MC）加工を手がけ、難加工材のアルミニウムが多い。航空系などさまざまな分野を手がけるが、半導体需要が好調で手狭になっていった。新工場の延べ床面積は従来比2倍の約900平方メートル。内装は人材採用を強化するためデザインにこだわり、

▲工場各所の大型モニターや全従業員に配布したタブレットで生産状況を閲覧する。左は白倉社長

白と黒を基調としたモダンな空間とした。新たに導入した3台の5軸MCなどはDMG森精機製で色調を統一。全てをIOT（モノのインターネット）でつなぎ、稼働状況などを把握する。作業員が担当する案件も個人単位で確認でき、状況に応じ適正な納期対応ができる。

既に本社工場では商社経験者の雇用でコネクタや基板の卸業を一部開始。白倉社長は

「2023年1月にはしっかりと立ち上がる」という。主力の加工業は各業界の動向を収集しやすいよう開発・設計・組み立てを一手に担う企業からの受注を優先。高付加価値化に取り組んでいる。

今後は脱着作業の無人化や、クリーンルームを加えた後の工程集約などを進め、医療機器向け部品など他分野への参入を目指す。22年9月期売上高は約5億円だが、3年後をめぐりに同10億円まで引き上げる。